

おめでとうございませぬ

第五十六回展入賞・入選の言葉

初挑戦・初入選

大竹 勝 (札幌)



私が東京にいた頃、お台場にレインボータウンが完成しました。美しい夕景の中のレインボータウンを記録に残しておきたいと思って、教室に通ったのが、写真を撮り始めたきっかけです。入選した作品は、冬に祝津漁港で撮ったものです。撮影していると、ちょうど蛸漁から帰ってくる小さな漁船の姿が見えました。これはめったに出会えないチャンスだから、よい写真が撮れるかも知れないと、関係者の方に撮影許可を頂き、船が港に着くのを待っていました。二匹六〜七キロはあろうかと思われ、蛸を、漁師たちは次から次へと勢いよく手づかみして陸に放り投げます。その力強さに圧倒されました。

その瞬間、空中に舞う蛸を撮ろうと思い、カメラを高速シャッターにセットして、夢中で撮った一枚です。

第一部一席

山本 隆晟 (札幌)



道庁赤レンガの庁舎では、初夏の午後には後方の窓から差し込む斜光で、赤い絨毯を敷き詰めた階段が輝く時間があります。

この瞬間に階段に立つのになさわしいのは外国人だと考えましたが、台湾からのツアー

客が多く、風貌は日本人と変わりありません。

男女の好ましいペアでは？ 男性のズボンの位置が低くはくのが流行で、富良野のへそ踊りのような短足でうつくしく思えません。

老夫婦では？「お父さん」と叱りながら、散歩の飼犬のように引き回しているお母さんが多く、肩を寄せ合ういたわり合いの姿に見えません。

「狙いを決めて通え」の教えを思い出し、何回かトライした二枚です。「この子達に輝かしい未来を残してあげたい」と背景にあるサミットの看板との意味づけにもなりました。

今回を励みに、「私のベストはNext one」を目指して、写真を撮る楽しさでゆきまします。これからも若く元気であるために。

第二部一席

二部門入選

松葉 師正 (留萌)



こどもの頃、何か行事があると、父親はコンFを出して写真を撮ってくれました。撮影のあとには必ず大切そうにカメラを拭いてケースに入れ、私が「さわらせて」と言っても、なかなか触らせてもらえませんでした。そんな父の姿を見て育つうちに、少しずつ写真に興味を持ち、高校生の時にお小遣いをためて買ったのが、写真の世界への一歩でした。

入賞作はナマコ漁で賑わう羽幌港で、買ったばかりの魚眼レンズで写したものです。百年に一度の不況の世の中で、ナマコは黒いダイヤと呼ばれ高値で取引されています。そんな活気のある様子を写真におさめたくて、何度も港に通い撮影した一枚です。

これからも写真を通して沢山の人の出会を楽しみながら、毎年入選・入賞できるように頑張っていきたいと思えます。

三部門入選

五十珂 洋子 (函館)



この度幸せにも三部門に入選しました。第二部での作品「港でお祭り」は、毎年六月に函館の白尻漁港で開催される「ひろめ舟祭り」を撮ったものです。祭りを楽しむ人々と、はなやかな漁船が一体になるように高い位置から俯瞰して撮りました。

夫婦で同じ趣味なので、イベントに合わせてかけるのが楽しみで、一年が早く感じられました。

写真を撮り始めたきっかけは、風景写真が好きで同行した際、私は山菜採りを楽しんでいました。夫に勧められてカメラとパソコンを買って、撮り始めて面白くなりました。パソコンの使い方も夫に教わり、プリントまでできるようになりました。

これからは運動を兼ねて歩き回り、写真撮影を楽しんでいきたいと思えます。

三部門入選

浅野 博義 (帯広)



早朝から日暮れまで農家の仕事に筋に歩み育ってきた私が、ある日ふっとしたことでカメラに関心を持ち、「どうしたらあのような写真ができるんだろう」と疑問を抱いたのがきっかけ。何はともあれ早速道新文化センターの写真教室に駆け込みました。それから数年十勝の田園に点在するサイロを追い続けました。そのうち写友より仲間と月例で磨きあえる話を聞き、道写協に入会、悪戦苦闘！今日までたどりつきました。

この度幸せにも三部門に入選しました。

第三部の「森のいのち」は、これぞ私の人生の生きざまを学ばせてくれる場と決め、何回も通い続け、何とか納得？の瞬間までたどりつけた二枚です。広大な田園のステージから、昼なお暗き鬱蒼と繁った森の中の溪流の川辺に入り、大自然の恵みをたっぷり受け、次の世代へと繋ぐ営みを続ける森の命なるものに出逢えた喜びとありがたさに、命を燃やした作品です。大自然から醸し出してくる心地よいメロディーを聴きながら…

ある港祭りの日、花火を撮ろうとシャッターを押してもカメラが勝手に動いて撮れず、つぎカメラが壊れたかと思いがっかりして帰りました。(実はオートモードになっていたのです)これをきっかけに、写真教室に参加したのが、写真を撮り始める出会いとなりました。

二席の「春光」は暑い日京都駅の中央階段で撮りました。京都には何回か行き、行くとき必ず見る階段ですが、その日は何か違いました。よく見ると手すり一本の光になり輝いているではありませんか。そこからドラマの始まりです。一人の少女がジュースを持ち降りてきました。

三部門入選

荒木 憲幸 (函館)



もうドキドキです。カメラを構えて子供には「まっすぐ降りて来て！」「太陽には「雲に入らないで！」「駅にいる人には「横切らないで！」と心に叫び続けながら一枚です。光りと子供、その他うまく表現できたか、また、違う構成があつたのではいつも写真を撮る度に考えさせられます。

これからも感じるままに自分の思う写真が撮れるようにシャッターを押し続けたいです。

この度幸せにも三部門に入選しました。